

## 青山忠正先生・今堀太逸先生退職記念号刊行にあたって

二〇二一年（令和三）三月三十一日をもって、本学部から青山忠正先生と今堀太逸先生のお二人の先生がご退職されます。規程の定めるところとはいえ、歴史学部にとっても、さらには日本史学領域にとってもこれ以上ない損失といわざるをえません。

お二人の先生の学問上の業績は、改めて申し上げるまでもないところで、本書に収められている著作目録によく示されております。

青山先生は、幕末維新期の政治史を中心に近世から近代にかけて、人物から事件、歴史事象に至るまで「明治維新」に関わる研究を深められ、「維新史」という分野が日本史学のなかで注目されるようになる、その立役者の一人であつたといえるでしょう。

他方、今堀先生は、鎌倉期に展開した専修念仏の問い直しに始まる仏教研究をきっかけに、浄土宗史さらには仏教史全体にまで及ぶ仏教史学研究という分野にふさわしい研究生活を送られてきました。

ともに広くかつ深い学識に裏付けられた、「歴史学者」と呼ぶにふさわしい存在であります。学内外に広くその名が知られている点も同

じであり、まさにその分野における第一人者といっても過言ではないでしょう。

お二人に共通するのは、学術研究への真摯な姿勢であることはいうまでもないことですが、特に文献史料に対する態度は、対象とする分野や時代、史料の形態が異なるといえども、同様に厳格であることが特筆できるでしょう。それは「伝説や神話に引きずられてしまうと、史料の言葉が本来の意味どおりに読めなくなり、人物像までが変形させられる」（『高杉晋作と奇兵隊』）という言葉や、（史料の引用）は「『うわべ』だけの紹介となることを危惧」するからである（『神祇信仰の展開と仏教』）というお二人の言葉でも容易にうかがえます。先生の前での史料に関わる話題の披露は、いつになっても緊張する瞬間であつたのは私だけに限ったことではなかったはずです。

ところで、お二人の先生は本学に着任されて以来、二〇年以上の長きにわたり学生の指導にも携わってこられました。先生の許からは多くの卒業生が巣立っていきました。今も研究に携わる者から、全く異

なる分野で活躍する者まで多彩かつ豊富で、これもお二人の先生が残された功績といつてよいでしょう。人情濃やかで、時には謹厳であり、筋の通らぬことを好まない。それは一見孤塁を守るの感を与えるかのようにありますが、私たちや学生・院生の愚問にもまた史料読解の大いなる誤りにも実に懇切丁寧に指導をされるなど、温かい心の持ち主でもあります。

先生の研究室を訪ね、心のこもった対応を受けた学生も数多いはずです。師としての先生は厳格でありながら、同時に慈愛に満ち満ちていたといえるでしょう。

お二人の先生が今後も矍鑠と、研究活動を継続されるのは、私たち後学の喜びであり、学界にとつてもこのうえない慶事と称すべきでしょう。先生方の学恩に対する感謝と祝賀の微意としてはいささか小冊といわざるをえませんが、先生方の薫陶を受けた者の一人として、今号を先生の膝下に献呈し、改めて両先生のご退職に際し、歓送に大きな制限が加わった次第です。なお、両先生のご退職に際し、歓送に大きな制限が加わってしまったのは今回の新型コロナウイルス感染症の流行によるものとはいえずに誠に残念でなりません。改めてお詫びいたします。

お二人の先生には今後とも末永きご健勝とご活躍をお祈り申し上げますとともに、引き続き本学部へのご指導ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

歴史学部長 貝 英幸